

芥川だより

発行日*2020年7月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



コロナがあぶり出した社会構造

一向に衰えを見せないコロナだが、世界の感染模様とその影響をみると改めて世界の深層を想像してしまう。やはりと言っては申し訳ないが衛生環境が整っていない地域での感染拡大や失業者の急増、経済的に弱い立場の人々が最も大きな被害を被っている。

統計すら整っていない地域での被害者は更に大きいにちがいない。どうしてこのように格差社会になったのであろうか？もちろん、都市部においても格差は甚だしいが、貧困国家の窮状とはまた違う。

ボルトン回顧録でも伝えられているように、アメリカの大統領ですら個人的な利害に執着しているらしい、ましてや民主的な投票環境にない国々のリーダーは国の将来よりも目先の損得にとらわれ、外国の国や企業の思うがままに操られ自国民を単なる労働力としてあるいは、無知な消費者として大企業の利益に貢献してきただけだったのだろうか。

永い年月をかけて懸命に働いてきた国民を救おうと政治が行われればもう少し改善が見られたはずだ。官僚や政治家の汚職が無くならず、目先の利害だけにとらわれた政治が続いてきた結果なのだ。確かに、国を想い未来を拓く政治家も多くいたのだろうが、大き力で握り潰されてきた。大企業にとっては、貧困な人々がどうしても必要だし、貧しい国も必要なのだ。

利益は平和な均衡した状態では生まれにくい。大きな格差があればあるほど利益は大きくなる機会がある。賃金が安い国や地域で作られ、高く売れる国や都市で売れば利益があがる。中国が生産立国になったのは、共産主義国であるから強力な政治力で国民を低賃金で働かせ外資を入れ外貨を貯めたからだろう。非常に多くの安価な労働力が商品となって外貨を稼いだのだ。圧倒的な労働人口の賜物である。

格差のない社会は単なる空論でしかないのか？私は、人の能力の違いは環境のなせる業だと信じたいのだが。

死をめぐるあれやこれ (68)

石川 吾郎

消費税をめぐるあれやこれ

「えっ、ウソ、千兆円の国の借金、ないの？ えっ、貧乏人をだましていただけなの？ えっ、有識者もメディアもグルなの？ IMFのプライマリーバランス黒字化目標もウソなの？ 何、このホラー。」◆最近ネットの若者に人気なのが、お笑い芸人としてしばらく前に人気を博していたアツちゃんこと中田敦彦の「YOU TUBE大学」だという。実際見てみると、実に多様なテーマをコンパクトに解説して、話術もうまくテンポよく進む。何よりアツちゃんの簡潔にまとめる力がすごい。その中で特に秀逸なのが「消費税増税」についての二回分。◆TVや大新聞が伝えない消費税の本当の姿をその歴史から解説をして説得力を持っている。曰く★「一千兆円の国の借金問題」が、実は大ウソ。★消費税は社会保障・福祉の財源と政府は言うが、実は法人税の減税の補填にされているだけ、ということ。貧しい人から搾り取って、金持ちを優遇している。★有識者会議の「有識者」というのは政府の仕事をもたらしている人々のことで、主要メディアの新聞は政府から軽減税率を適用してもらっている存在。というわけで消費税について批判がましいことを決して言おうとしなさい、など。◆このコロナ禍の国民困窮の状況で、政府は百兆円規模の補正予算を組んだと伝えられてはいるが、政府はさっそくコロナ後の増税を計

画しているという。また消費税引き下げは絶対にしようとしなさい、それどころかこの六月末でキャッシュレス還元を終了という、地味に消費税の増税を延期さえもしないで実行している。これにみなさんは気が付かれていますだろうか。◆このネット番組の中でアッチャンが、自分が消されるのではと、ビビりながら語っていることからして、その闇の深さが想像できる。この動画を見るにはユーチューブのホームページで「中田敦彦 消費税」で検索すると出てくる。この動画のネタ本は、『こんなに危ない消費増税』（ビジネス社）というマンガだ。このマンガも直接読まれることを強くおすすめする。マンガとはいいながら正確な分析で説得力がある。一人ひとりが考える貴重な資料を与えている。



芥川だより一六二号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 67	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 76	坂本一光	2
哲学希いの時事放談 26	祖蔵哲	3
大峰興駆道 32	下村嘉明	5
大人の今昔物語 69	石川吾郎	5
新型コロナウィルス愚考(2) 明石幸次郎		6
オクラの山たより 46	因了生	8
隠された歴史 21	満田正賢	11
孫ウオッチング 32	福田 圭	14
道をゆく 15	成瀬和之	14
編集後記	S K 生	15
ふみの道草 25	山椒魚	16
俳句	土田裕 影山武司	16

素老人☆よもだ帳 (76)

坂本一光

◆私には夢がある

『一九六三年八月二十八日、職と自由を求めた「ワシントン大行進」の一環として二十五万人近い人々がワシントンDCに集結した。デモ参加者たちは、ワシントン記念塔からリンカーン記念堂まで行進した。そこですべての社会階層の人々が、公民権と、皮膚の色や出身などに関係なくあらゆる市民を対象とした平等な保護を求めた。』

この日最後の演説者となったのが、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士だった。キングの行った「私には夢がある」(Have a Dream)の演説は、独立宣言にも盛り込まれている「すべての人間は平等につくられている」という理念を網羅するものだった。あらゆる民族、あらゆる出身のすべての人々に自由と民主主義を求めるキングのメッセージは、米国民権運動の中で記念碑的な言葉として記憶されることとなった。

その次の年、米国連邦議会は「一九六四年公民権法」を通させた。それは公共の場における人種分離を禁止し、公立学校・施設における人種統合を規定し、人種や民族に基づく雇用を違法とするものだった。同法は、南北戦争に続く「再建時代」以来、最も包括的な公民権立法だった。』

— 以上は、米国外務館・東京のホームページに掲げられた「私には夢がある」(一九六三年)の演説全文の冒頭に置かれた解説である (<https://americancenteryapan.com>)。』

新型コロナウィルス蔓延のさなかに、警官による黒人青年の圧殺に端を発し、全米及び世界に広がった抗議活動をテレビに見ている、素老人は、キング牧師の演説を思い出した。その演説を検索する中で見つけたのが、このような解説を付けて米国自ら紹介する演説全文であった。ここにはもう一つの米国がある。以下、演説の抜粋。

『私には夢がある。それは、いつの日か、この国が立ち上がり、「すべての人間は平等に作られている」ということは、自明の真実であると考えられる」というこの国の信条を、真の意味で実現させるという夢である。』

私には夢がある。それは、いつの日か、ジョージア州の赤土の丘で、かつての奴隷の息子たちとかつての奴隷所有者の息子たちが、兄弟として同じテーブルにつくという夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、不正と抑圧の炎熱で焼けつかんばかりのミシシッピ州でさえ、自由と正義のオアシスに変身するという夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、私の4人の幼い子どもたちが、肌の色によってではなく、人格そのものによって評価される国に住むという夢である。

今日、私には夢がある。

私には夢がある。それは、邪悪な人種差別主義者たちのいる、州権優位や連邦法実施拒否を主張する州知事のいるアラバマ州でさえも、いつの日か、そのアラバマでさえ、黒人の少年少女が白人の少年少女と兄弟姉妹として手をつなげるようになるという夢である。

今日、私には夢がある。

私には夢がある。それは、いつの日か、あらゆる谷が高められ、あらゆる丘と山は低められ、でこぼこした所は平らにならされ、曲がった道がまっすぐにされ、そして神の栄光が啓示され、生きとし生けるものがその栄光を共に見るようになるという夢である。』

爾来、半世紀を越える年月が過ぎた。その年月は、何を変え、何を変えなかったであろうか。それは、米国においてだけではない。それは、日本においてもである。

今日、私には夢があるだろうか。それを考えなければならぬと思つた。

(かたちは心であり、心はかたちになる ■ 大分の素老人)

哲学生命の時事放談(26)

祖蔵 哲

ウィズ&アフターコロナの哲学

『ジレンマ』

前号で5月末の「COVID-19緊急事態宣言」解除の知らせを書いてから一か月足

らず。早くも心配された第二波がやってきそうである。世の中が「新しい日常」をどう過ごしたらいいのかを考える前にすべてが逆戻りしなければならぬ。すなわちそれは「Stay Home」「自粛」という「隔離」である。カミュの小説「ペスト」では「流刑」とたとえられていたが、我々は覚えない罪によつて罰せられるのである。

さて、爺いも高齢者の故、感染のリスクは高く、人との濃厚接触は避けたい。しかし、多くの「不顕性感染」無症状病原体保有者」が感染媒介となつていて、現状を考えると「人を見たら泥棒と思え」ではないが、「人を見たらコロナ感染者と思え」というような疑心暗鬼の状態になる。「人を見たら泥棒と思え」は「正直者はバカを見る」に通じる諺である。では本当に正直ものがバカをみて損をするのだろうか。このような世の中は「不信」「疑い」が「信頼」「信じる」よりも優先する「不安定」な世界だ。ここに「監視社会」が生まれ、最近よくある、マスクをしていない人を見たらイライラして注意する「マスク警察」が登場する。少し前までは、「緊急事態」で外出している人に対しての「自粛警察」が横行していたが、すぐに新たな任務の警察がうまれた。つぎに予想されるのは「消毒警察」。スーパーの入り口で、店員でないのに買い物客に勝手に消毒をうながして見張る人や、スポーツジムで消毒液の中心について「これは本当に消毒液か」と詰問したり、「清掃の拭きが甘い」と詰め寄ったりする人のことをさすらし

い。

フランスの哲学者、ミシェル・フーコーの著書「監獄の誕生」は、すでに以前から現代社会のこの「全員警察」の成り立ちを説明している。フーコーはこの本で、中央の監視塔から周囲の監房を見渡すことができ「パノプティコン」(一望監視施設)という監獄施設について取り上げている。「常に監視されている」という意識を持った囚人は、自らを監視するという視点を心に宿し、権力への自発的な服従に導かれていく。という仕組みを、フーコーは近代における権力と個人の関係の例えに用いている。

現代の社会は、以前のようにわかりやすく国家権力が一方的に人々を監視するのではなく、一般の人たちがお互いに監視し合うという「相互監視」の状態に陥っている。例えば「あの人は不要不急の外出をしている」「県外ナンバーの車が来た」といったことを警察や役所に通報する人が出てきている。自分も感染するのではないかとの恐れも手伝って、人々が自ら監視社会化を進行させている。政府が口を出す前に、人々のほうからお上に自分たちの「自由」を進んで差し出しているわけだ。自らが手にしている自由をそんなに簡単に手放してしまつてよいものなのか、冷静になつて考えてくれ。フーコーはそう訴えている。監視社会化が進めば安心が得られるかもしれないが、そのぶん個人の尊厳も失われることになる。さらに情報技術によつて個人の行動は監視されるのがわかつていても自

らの行動情報を差し出すという「コロナ追跡アプリ」なるものが日常化している。

さて、この新型コロナ、緊急事態宣言が解除されても、現在は治療薬やワクチンが量産前のため、「新しい生活様式」を取り入れて中期的には新型コロナウィルスと共存「ウィズ・コロナ」していかなくてはならない。また、治療薬やワクチンが量産された後の、コロナ後の世界「アフター・コロナ」には、この未曾有の経験を経て、特定の意識・価値観や行動様式は変化したまま元には戻らないだろうと言われている。長期的に考えて、その分野は「社会」「技術」「経済」「環境」「政治」にわたる。そして起るのがこれらにおこるのが対立「ジレンマ」である。

「経済」優先か「自粛」か。「マスク使い捨て」か「環境保全」か。「自宅孤立」か「交流」かなどの「ジレンマ」である。さてこの「ジレンマ」とはなんだろうか。

(1)「囚人のジレンマ」

「ジレンマ」とはギリシヤ語で「2つの仮定」を意味し、ある問題に対して2つの選択肢が存在し、そのどちらを選んでも何らかの不利利益があり、態度を決めかねる「葛藤」状態のこと。

この哲学的思考実験で有名なのが「囚人のジレンマ」である。『ある状況下に置かれた2人の囚人が沈黙を守り続けるか、罪を認めてしまうかという問題』。ただし、囚人は共犯者がなんと答えているかわからないという状況にある。

囚人のジレンマをわかりやすく説明すると、2人の銀行強盗が逮捕され別々の取り調べ室に連れて行かれます。取調室で警察は2人に「罪を認めるか、黙ったままいるか選ぶことができる。もしお前が罪を認めて、共犯者が認めなければ、お前の懲役を共犯者にかぶせてやる。つまり、お前は釈放だ。2人とも罪を認めなければ本来の懲役より短くしてやる。もし2人とも罪を認めれば、本来の懲役そのままになる」と提案する。囚人にとって最善の選択は、お互い罪を認めずに、短い懲役を受け入れることに見えるが、自分の利益のみを追求する限り互いに裏切りあう、という結果が発生する。これがジレンマと呼ばれるゆえんだ。囚人のジレンマは、不十分な情報しか与えられず、自身およびもう一方の人物の意志決定が結果を大きく左右してしまう場合において、人間は自分の利益を優先してしまい、結果的に最善の選択をできない、ということを教えてくれる。

このジレンマは(の)コロナ禍にあつて同じようなことが様々な分野で起つている。

「社会」においては「監視か感染防止か」「協力自粛か外出協力か」「経済」では「封鎖か失業、飢餓か」「政治」では「規制か自由か」などである。そして倫理学では「法と道徳」の問題となり、宗教では「自利と利他」の問題となる。いずれにせよ、十分な情報や判断力が欠如すると全体として誤った選択となる。

(2) 哲学「ジレンマ」「トロツク問題」

ここに、もう一つの哲学的「ジレンマ」「トロツク問題」がある。「暴走する路面電車の前方に5人の作業員がいる。このままいくと電車は5人をひき殺してしまう。一方、あなたはポイント进行操作し電車の進路を変えて退避線に入れば、その先にいる1人の人間をひき殺すだけで済む。どうすべきか?」……つまり「5人を救うために1人を犠牲にすることは許されるのか?」という問題である。

コロナのトリアージ(識別救急)「5人の若者を救うために、1人の老人の人工呼吸器を停止するのは許されるのか?」と同じ問題である。1人を犠牲にして5人を救うとき、暴走電車の場合は正当な行為だと感じ、コロナの場合は不当だと情感的に感じる。この「倫理的ジレンマ」は、長年にわたる議論が続いている。2009年には、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の『白熱教室』でも取り上げられたのは、記憶に新しい。

このジレンマが示唆するのは「正義」の問題である。

- (1) 「正義」を数で決められるのか?
- (2) 手段によって「正義」は変わるのか?
- (3) 対象が誰かによって「正義」は変わるのか?

(1) はより大きな善が得られるほうを正しいと判断する「最大多数の最大幸福」を標榜するイギリスの哲学者ベンサム流「功利主義」の考え方である。しかし、そこに異議を投げかけるのがドイツの哲学者カント

の「義務論」(2)である。カントは「人は手段ではなく、目的であるべき」で、「人の権利を尊重せよ」と考える。多くの人を救うためであっても、その手段として人を殺すのは「正しくない」となる。「将来ある若者を救うために老人の人工呼吸器を停止する」場合に、人は「手段として問題がある」と感じる。

イタリアの哲学哲学者トマス・アクィナスのいう「二重結果論」においては、「道徳的により行為がたまたま悪い結果を生むのは仕方がないが、よい結果を得るためにわざわざ悪い行動をとるべきではない」と考える。人工呼吸器の停止＝殺人という行為を正当化するのは、人間心理的に難しい、というわけだ。そこで、ステップは(3)。

犠牲になる老人、あるいは助かった若者のうちの誰かが「自分の身内だったら」どうだろうか?

(3) ステップ目のキーワードは「利他主義」である。「他者の利益のために行動する」という利他主義では、「常に他者を助ける」という判断をするため、自分が犠牲になる場合も含めて、相手が誰かによって区別せずに助けなくてはならない。

しかし、哲学者ニーチェの考え方では「それは健全ではない」という反論が生まれる。いくら利他主義でも、老人が家族の1人で現に人工呼吸器をつけているなら、若者を犠牲にしても家族を救おうとするほうが健全である、と。

ジレンマを哲学の問題として考えるなら、

こうしたステップを経ることで倫理的な問題に対し、なんとなくではなく、一貫した論理をもって結論付けることが大切である。

ちなみにこの「トロツク問題」に対する大多数の意見はポイント进行操作し1人を犠牲にして5人を救うである。しかし、これは間違っている。正解はトロツクがポイントを通過する瞬間に操作して切り替えるのである。そうすればトロツクは手前で脱線してどちらの命も救える。必要なのは「どちらか」ではない。「どちらか」である。最初から選択のみを受けいれるのは思考停止である。「選択をしない」のも判断に入れるべきだ。普段からのこの思考が非常時の判断には必要である。

これはさておき、そもそもコロナ禍のジレンマはこのような真のジレンマだろうか。

改めてコロナ禍の経済ジレンマを示すと

- A 『経済活動を自粛しなければ、〇人が死ぬ』
- B 『経済活動を自粛すれば、〇人が死ぬ』である。

A については、医学・疫学・統計学などのプロが知恵を結集して、いろいろな科学的な議論がなされている。しかし、B についてはどうか。餓死・病死・自殺・治安悪化による事故や事件による死など短期的な視点はもちろんのこと、少子化の加速や科学技

術の発展の停滞など、中長期的視点でも様々な社会へのマイナス影響があると考えられるが精緻な予測がなされていないのが現状である。そもそも経済学自体が科学的なものかどうかが今日疑問視されている。なぜなら予想される結果は検証不可能であるからだ。そのような現状では①の偏った情報だけがあるのみでジレンマにはなっていないのである。

コロナ禍のジレンマ「自粛か経済活動か」「老人か若者か」はどちらを選ぶというジレンマではなくカントの義務論を援用して両方を選択すべきである。なぜなら、どちらを選択してもその結果は誰にも予測できないからである。我々に課せられるものは人間の生命は区別なく平等に尊重されるという「義務」である。この「義務」が普遍的に適用できる社会が自由で平等で健全な社会である。現在のような「例外状態」こそ人々の普遍的義務が選択されるべきである。

大峯奥駈道(32)

下村嘉明

見えない頭の中の状態を想像しながらリハビリするのだが、どうもうまく出来ないが、とにかく毎日続けることにした。ケガするまでやっていたように川の堤を

ひたすら歩くのである。しかし、術後はゆっくりと歩くのが精一杯で長くは歩けなかった。少しづつ歩くスピードを速くし距離も伸ばす。毎日、そんな事を繰り返していたら、頭の中が熱を持っているのか額に汗がにじんでくる。体温は平熱なので頭だけが熱を持っていると思えたが、そのうちに熱も引くだろうと楽観的に考え寝る時にはアイスノンで冷やしながら寝た。

術後2週間の健診で異常なく、念のため1カ月後にCT検査を受けたが異常はなかった。しかし、頭の熱は収まらなかつた。それから2週間ほどして、朝起きたら急に頭の中が静まりかえつたように感じたので、私はこれで直つたのだと直感した。それから1週間位したら頭の熱も引いた。以前のような感覚に戻つたのである。

この間も運動は続けていたので、歩いたり走ったりしていたが頭の回復と同じように走るスピードも回復してきた。筋肉もほとんど以前のように回復したと思ひ六甲山に登ったら回復は8割程度だと実感した。あと10回も登れば回復するだろうか、少し甘い考えとは自分では分かつているのだが、せめて書くだけは許してもらいたい。

ネットか何かで読んだ記事の中に、ベテランの看護師が「あっさりと死ぬ人と粘っこく生きる人の違いは？」というようなテーマで書いていたので気になって

読んだ。彼女は3点の違いを夫の生きざまを混ぜながら書いていた。

1点目は社交性である。入院中に多くの見舞客がある人。2度以上見舞に来るも幾人かいる。2点目は、スポーツを入院前もしていたし、退院後もしてる人。3点目は、医師の助言よりも自分流に好物なものを食べ続ける習慣を持っている。これら3点を比較すると、あっさりと死ぬ人と、粘り強く生きる人との違いがあるというのが看護師さんが介護現場で見た感想だという。私も阪大病院に長く入院していて偶然にもこの3点をやっていたのだ。もちろん聖書を加えなければいけないが。病院内に散歩道があるという点では阪大病院に優るところは無い。

自然環境が良く散歩道があつて病院食もうまくレストラン等も完備している。長期の入院になりそうであれば阪大に限る。病院設計者は散歩道をもつと考えてほしい。必須の設備である。歩いたりジョグしたりと運動が続けられるのは、ひとえに皆さんのお陰であるが、自分なりの動機としては何かといえ、大峯奥駈道有機會が来れば縦走をしたいからである。なんとしてもせめて5回ぐらひは通して歩きたい。奥駈道は私の人生そのものであるように思える。厳しい山々を登り下り命がけで歩く苦難の道が私の生きてきた人生であり、未来の人生なんだと自分に言い聞かせている。

大人の今昔物語(69)

石川 吾郎

今回は、路傍に放置されたしやれこべが語り、意外な殺人が明らかになつた顛末です。教科書に出ない度は二／五。鬮、高麗の僧・道登(どうとう)に恩を報いる話(巻第十九 第三二)

今は昔、高麗からこの国に渡来した一人の僧がいた。その名を道登といつた。元興寺(今の飛鳥寺に当たる)に住持していた。功德を積むために初めて宇治川に宇治橋を造営しようと工事を進めていたが、同じころ北山科というところに恵満(えまん)という人がいた。道登はその恵満という人の家に通ううち、その家を出て、元興寺に帰ろうと奈良坂山を通つてみると、その道のほとりに一つのしやれこべがあり、人に踏まれたりして起こして、従者の童を呼んで、このしやれこべを取つて木の上に置かせた。

その後、時を経て、大晦日の夕暮れ方になり、元興寺の門に人が訪ねてきた。「道登大徳の童子にお会いしたい」と、言うので、これを聞いて、その童子は僧坊を出て門にゆき、この人物に会つた。

しかしそれが誰なのかはさっぱりわからない。

「私は、あなたの師である道登大徳の恩を受け、長年の苦しみからのがれて、安らかにすごすことができるようになりました。そんな訳で、この恩に報いるには、今夜以外にはないと参ったのです」と言う。

童子はわけもわからないままその人に連れられて、どこへ行くのかはわからなかったが、ある里の一軒の家に行き着いた。言われるままに童子はその家に入る。するとそこには多くのご馳走が用意してあった。その人はそれを童子にふるまい、自分も食する。そうするうちに夜も更けてきて、童子はその家に泊まることになった。やがて暁の勤行の時刻になり、人の声が聞こえてくる。

そのときになりこの人物、童子に言うに「私を殺した我が兄がここに来ました。私はすぐに出て行きます」という。童子は不審に思い「これはどういう訳ですか」と尋ねる。答えるに「私は昔、兄とともに商いして方々へ出かけ、銀四十斤（一斤は約六百グラム）の売り上げを出していました。これを持って兄とともに奈良坂にさしかかったときに、兄はこの銀を独り占めにして奪い取ろうと私を殺したのです。その後、兄は家に帰り、母には弟が盗賊に殺されたと報告しました。その後、年月を経ても、私のしゃれこうべはあの場所に放置され往還する人々に踏

まれていたのですが、あなたの師である道登大徳がこれを見て慈悲の心をもたれ、あなたに命じて木の上に置かせられて、私の苦しみを解放していただきました。

この故に、あなたのご恩も忘れません。今宵の大晦日に、家の者は私のために年末の魂祭りの供物を供えております。これをあなたに食べていただくために、お連れしたところでござります」と言うのと、その人物の姿は見えなくなってしまう。

童子はこれ聞き、奇妙だと思いつ間に、その殺された男の母親が、殺した兄とともにその殺した霊を拝むためその家に入ってきた。

母と兄の二人は童子の姿を見て驚き、「これはどなたですか」と、ここへ来た理由を尋ねた。童子はこの死んだ弟の霊が語ったことを委細詳しく語った。母はこれを聞いて、弟を殺した兄を大いに恨んで、泣く泣く言うに「愛しい我が子を殺したのは、お前だったのか。これまでこれを全く知らなかった。盗賊によって殺されたと言っていたのは、全くの嘘だったのだな。ああ悲しいこと」と言っ、なき悲しんで、童子を拜んで食べ物を与えた。

童子は、僧坊に帰り、師の道登大徳にこのことを報告した。師の道登はこれ聞いて、哀れがったということだ。

そのようなわけで、死んだ人の屍さえもこのように恩返しをするのだ。況わん

や生きた人が、恩を忘れたりしようか。恩を報じることが仏菩薩も喜ばれることである。

そんなわけで宇治の橋は、この道登が初めて造営したものである。これをまた、「天人が降りてきて造ったのだ」とも言われている。これによって「大化」という年号があるのだとも言われる。

これを考えるに、道登が橋を造営するのを天人が降りてきて助けたのだろうか、詳しくはわからない。このようにも語り伝えているということである。

《コメント》

宇治橋を造営した、朝鮮半島からの渡来僧にまつわる逸話です。現在の元興寺は奈良市にあります。この話の当時は飛鳥寺がそう呼ばれていたとことです。また昔は大晦日の夜には、現在のお盆の行事に近い魂祭りが行われていたもののようにです。

殺された弟が恩返しをするのが、なぜ道登その人ではなく、その童子だったのかは素材に疑問がわきます。

この話は、一つのしゃれこうべから昔の殺人事件が明らかになる内容ですが、この話の先の展開は非常に気になるところです。長男が弟を殺したということを知った母は、長男との生活をどうするのだろうか。母はこれまで長男とそこそこ仕合せに生活してきたのであれば、それ

が壊されてしまうことになるのではないかと。また弟を殺したことを明らかにされた兄は、これからどう振る舞うのだろうか、などなど・・・考え始めたら次から次へと疑問が湧いてきてしまいます。このあたりを想像すると、がぜんこの話が面白くなってくるのでした。

新型コロナウイルス愚考（その3）

明石 幸次郎

コロナ禍が少しは収まり、人々の活動が元に戻ろうとしています。東京では、毎日50人を超える感染者を出しています。特に夜の新宿、池袋で、若い20代30代の感染者が多いと言われています。

5月、6月もボランティアで十三に、ほぼ毎週、電車でマスクをして通ってました。6月に入ると十三の人の賑わいはコロナ以前に戻った感じでした。

この3月末に、兵庫県庁元職員の小学校以来の友人が亡くなり、その葬式に石まで新快速電車で行ってきました。

別にこの友人はコロナで亡くなったわけではありませんから、病院への見舞いなどが出来ました。

友人は県庁を60歳で退職して、その後10年は当に悠々自適で、18歳から半

世紀以上の長きに亘り吸っていた、タバコの習慣も止めず、それが原因で肺がんが、2月中旬に見つかり、その時はもうステージ4の末期で治療が出来ないと医者から言われたそうです。

それは、突然の、奥さんから突然の電話の知らせで分かったことで、「主人が肺がんで入院して、余命幾許もないといわれ、明石さんにお知らせしようかどうかと迷いましたが……このコロナ時期ですから、お見舞いに来ていただくのも何ですが」と言われたので、こちらも慌てて「えー！1月初め頃に墓参りした時に、お宅に寄りましたが、相変わらずY澤無愛想やけど元気そうに見えましたが？」と言うと「あの時は玄関だけの立ち話で、主人は上がれとも言わずで失礼しました。1月から余り食事をせず、寝て、テレビを見てばかりでした。まあ、夜分にこの様なことで失礼しました」と電話が切れました。

奥さんの声は割合落ち着いていて、もう心の準備は出来ているのかと電話の声でわかりました。明石さんだけには、お知らせしなければと迷いましたとの奥さんの言葉が引っかけ、寂しく、切なく感じとられ、これは直ぐにでも、病院に見舞いに行かなければと思ひ、翌日、奥さんに電話して、病院の名前を聞き、直ぐに三ノ宮經由神戸地下鉄に乗り換え西神中央にある病院まで、行きました。入院部屋で寝ている、痩せこけてしま

った友人を見て「おい、元気出さんかい！ここで何してんねん（播州弁）！」と奥さんの横で、手を握り、頬をさすったら、友人は「お前、何しにここに来たんか」という顔をこちらに向け、しんどそうに目を開けて、につこりともしなかつたが目で「おう！」というような反応をします。奥さんからは本人が誰にも知らせるなど言われていますと事前に聞いていたので「あのなあー。墓参りの後、お前の家に寄ったら、ここに入院していると聞いたので慌てて、来たんや！ヨネコ（小学生からの綽名）大丈夫か！元気出せよ。お前は、中学校、高校の同窓会にも一回も出てこないし、2年前から、同期やっっている高校の野球部のOB会にも来ないし、冷たいなあー」と言って両手で彼の手を握ると氷の様な冷たさであった。その言葉に少しにつこりと反応して、何でそんな会に出なアカンのや、と口を開きかけた。「今度、又、やるので、案内するからなあ。元気を出せよ！」と話しかけたが、直ぐに目を閉じて、しんどそうに横を向いて、目を閉じてしまった。

その後、奥さんと病院内の喫茶ルームでコーヒーを飲みながら、「Y澤君、私が話した事は、少しは反応したようですが、今日はどんな具合ですか？」と聞くのと、「いや、驚きました。私と娘が何か話しかけても、家にいる時と同じように鬱陶しいなあという顔をして、何も答えず、直ぐに横になってしましますが、明石さん

が話しかけられたら、最初はびっくりしたような顔をして、後は、こんな時に見舞いに来てくれて、有難うと言うような顔をしてました。主人があんな顔をしたのは、久しぶりに見ました。良かったです。本当に有難うございました」と言われたので、こちらも、ほっとして「そうですか？ああーそれは、良かったです。早くこのコロナ騒ぎが収まったら良いのですが、又、お見舞いに来ます。ところで、アイツは何で奥さんから話しかけても鬱陶しそうにするんですか？やはり、しんどいんですかね？」と聞くと「いや、主人は元気で家にいた時もずっとそうでした。何もせず、テレビばかり見て、うたた寝してるからと私が、テレビを消したら、直ぐに目を覚まし、見るのに、何で消すんや！と怒るんです。もうテレビを見るだけで何もしません。買い物は私が車でみんなします。昔からの古い家なので、ご近所の付き合いか、何か役が回ってきてても、みんな私が代行してやっています。県庁も60歳で辞め、本当は65歳まで勤められるのですが、何で、県の外郭団体まで入って毎日出勤せなアカンのや！自分は、60歳まで嫌で、しんどかったけど、役所勤めたわ！もうエエということで、それから、ずっと家で、テレビとタバコの生活でした。役所を辞めてから、健康診断は行ったことがなかったんです。病気になっても近所に敷医者ばかりやから、行きたくないと言

って、一度も行ってません。私と娘が言ってもお医者さんには、行きません。それで、肺がんと分つたのも、しんどいと倒れたので、救急車を呼んで病院に運ばれて、診断してもらったら、末期がんで他の病院に行つて下さいと言われたんです。もう、それは、あの人がこの状態を招いたんですね。仕方がないと思つてます。本人はどう思っているか分かりませんが、俺が入院しているのは、誰にも言うなどだけは言われていますが！「本人は、自分が末期がんだと分つているんですか？」と聞くと「いえ、言つてません！もし、言つたら、どんな顔されるか？又、ジタバタする姿を見せられたら私も子供達も嫌ですからね。子供3人にはあの人の症状は話していますが……まあ、今日は、明石さんに来て頂き、話しかけて頂いて、主人のあんな嬉しそうな顔を久しぶりに見ました。私も電話させて戴き直ぐに、コロナのこんな時期に来ていただき、すみませんでした。なぜか、ほっとしました。これから大阪まで帰られるのですから、明石まで車で送らせて頂きます」ということで、病室に戻り、友人に「又、来るのでなあ！」と骨と皮になった冷たい頬に手を添えて「おい、オジン、元気を出せよ！」と言葉を掛けて、奥さんと病室を後にしました。帰りの車の中で、奥さんに「Y澤くんのもう一つの綽名がオジンと言うのです

が知ってますか？ アイツは小学校頃から盆栽が趣味で、又、白髪が少しあったので、近所の同級生がオジンと綽名を付けて、皆、本名は呼ばず、オジンで皆は呼んでいました。ヨネコは確か高校か役所に入ってから綽名です。もう小学校の時期から、退職後の趣味を考えて盆栽をやっていた大した奴やと思っていました

が、家で何もしない！ 私なんか2年前に仕事辞めて、家内から主婦は停年がないので、しんどいわ！ と言われたので、翌日、俺が代わりに主夫？ やつたるわ！ と言って買い物、掃除、食後の食器洗い、週1回の夕飯、昼は、ほぼ毎日、自分で作ってますよ。何もしなかったら、もう家から放りだされますよ。Y澤みたいな男は幸せや！しかし、反面、奥さんは大変でしたね」と笑いながら言う「そうなんですよ！ 盆栽と言えば家の庭に、あの人が作ったハウスがありまして、少しの花と盆栽を育てて、その育て方を長女だけに教えているみたいです」と車を運転しながら、少し嬉しそうに答えた。

「処で、アイツはT鳥大の農学部を出て、昔から大きな畑と田圃を持ってましたわね。退職後は何にもしなかったとは、畑などはどうしたんですか」「ああ、農地は一回り上の姉の旦那さんに殆ど譲り、自分はA高校の近くにご存知だと思いますが、小さい畑を持っていて、野菜を植えたなら毎日水遣りに行くのは大変やと言うことで、果物を柿、みかん、栗、梨、

イチジク、ヤマモモ、葡萄、それとあと何種類かを植えています。果物は、一週間に1〜2回、水をやりに行つて蟲を取つたら、それで良いので、楽やと言う事で、これだけはやっています」ということで、車の中で喋りながら奥さんの愚痴を聴き、奥さんの知らない友人との少年の頃の”スタンバイミー”的な思い出話して、明石駅まで送ってもらいました。

それから、5日後の昼前に奥さんから「主人が今、亡くなりました。急ですが明日が、通夜で、翌日が葬儀です」と落ち着いた声の電話がありました。

翌日、新快速電車に乗り、明石駅で山陽電車に乗り換えて、葬儀場に行くと大勢の県庁職員、OBと思しき人達が一様に喪服とマスク姿で、既に祭壇前の椅子に座っていました。その人数を数えたら50人くらいはいました。役所の人は大変だなあと感じながら、私は最後列で、そつと座っていました。焼香を終え、通夜が終つた後、出口で並んで挨拶をしていた奥さんに声を掛けて「ご愁傷さまで。明日は、来られませんが、お気を落さずに、お気を付けて下さい」と声を掛ける「はい。有難うございました。コロナで亡くなっていたら、最後の言葉も掛けられませんでした。明石さんに、この前、車の中で色々主人の思い出話を聞きまして、気が晴れましたし、最後を看取ることが出来ました。気をつけてお帰りにください」と、ほっとしたような顔をさ

れました。

帰りは夕刻を過ぎた7時の新快速電車のがらがら席に座り、マスクを取って、コンビニで買ったビールを飲み、70歳を前に早く往つてしまった友人との思い出病院でのやせこけてしまった顔を思い出しながら、窓に見えるライトアップした明石大橋を右手に見ながら、後は、うとうとして寝てしまいました。

大阪駅に着く手前の淀川鉄橋を通過するガタゴトという音が覚めて、駅に降りましたが、プラットホームの人も疎らであつたので、改めて今はコロナで通勤の人は家でテレワークをして、学校も休みで、みんなは、ステイホームなんだと思ひ直し、各駅停車の普通電車に乗り換え、家にマスクをしながら辿り着きました。

コロナ禍で、もし、友人がウイルスに感染していたら、家族を含め、見舞いにも行けず、亡くなる時に十分な別れも言えない。葬儀では、棺の故人の顔を撫でたり、花を入れたりする事も出来ず、火葬場では限られた人しか立ち会えない。

友人の死は、癌であつたので、家族はそれなりの心の準備が出来ただろうし、私も見舞いに行けて、結果的には最後の言葉を交わすことが出来て、なぜか、友人を亡くした、どうしようもない喪失感を感じなかった。

翌日は雨であつたが、大勢の人達に見送られて友人は逝つてしまった。私は西

の方に向かって家の中でひとり黙祷をしていました。

オクラの山たより (46)

困了生

一

江戸で八代將軍徳川吉宗が亡くなった一七五一(宝暦元)年八月、蕪村は京にやつて来ました。宋屋などの夜半亭宋阿の門人たちのつながりによつて京の暮しが始まつたことは先回述べたとおりです。

蕪村が京にやつて来る少し前から幕府の年貢収納高が江戸時代を通じて最高となつた時期をつくつた享保の改革も終わり、時代は緩やかに衰えを見せていきます。それとともにというべきでしょうか。洪水が各地で絶え間なく起きました。幕府も各藩も治水対策に追われます。

たとえば一七四二(寛保二)年七月二七日から八月一日にかけて強烈な台風が日本列島を襲いました。京都では三条大橋が流れ落ち、伏見・淀は大洪水となっています。もちろん、この台風のために関東や信州の河川もつぎつぎと氾濫し江戸では本所・深川が水浸しとなり「武功年表」には溺死者二千人と記されています。その復旧のため幕府は早くも十月には熊本藩細川家・萩藩毛利家・津藩藤堂家などに関東の川筋の御手伝普請を命じ

ました。御手伝普請とは諸費用の一切を藩が請け負う普請工事です。そのため藩は多額の費用をまかなわねばなりませんでした。

そうした御手伝普請で最も悲惨でかつ有名なのが宝暦治水です。

木曾川・長良川・揖斐川のいわゆる木曾三川でも宝暦元年の頃に洪水の被害がたびたび起きていました。幕府はこの被害の修復とあわせて、かねての懸案であった木曾三川の分流工事を実行することにしたのです。この一連の工事を御手伝普請として命ぜられたのは鹿兒島藩島津家でした。鹿兒島藩からは財政担当の家老であった平田靱負（ひらたゆきえ）以下、総勢九四七名が派遣され、一年三ヶ月およぶ難工事の末に治水事業が完了しましたが、この工事によって鹿兒島藩が受けた被害は甚大でした。幕府の役人や地元住民との軋轢によるトラブルで責任をとって切腹・自決したものの五十二名、赤痢などによる病死三十二名です。そして工事の費用も当初の十両をはるかに超えて四十万両もの出費（大坂や江戸の豪商からの借入金でまかなった）となりました。当時の鹿兒島藩の年収は十二から十四万両でありながら、すでに六十六万両（推定ですが利子だけでも年に約十萬両。これだけで藩の年収の大半が消える。国債の発行によって国債の利子を払っている日本の現状とよく似ています）もの負債を抱えていましたから、これは

大変な負担でした。これらの責任をとって工事完了を確認した翌日、平田靱負は鹿兒島の方角に頭を向けて自決しています。この負債は八十年後の天保の頃には五百万両にふくれあがり利子だけでも八十万両という巨額になりました。

これは鹿兒島藩だけのことではなく各藩とも財政逼迫の状況は同じでした。御手伝普請だけではなく江戸や大坂の屋敷の維持費や大名同士の間際費。このために各藩は年収の半ば以上を出費していました。バカにならないのが三年に一度の参勤交代。鳥取藩の記録では鳥取から江戸まで一九五七両かかっています。ざっと今の金額で二億円。往復で四億円です。これに出席した家臣の江戸の滞在費までいりますからかなりの財政負担になったはず。幕府も各藩も年貢収納だけの年収ではもはや首が回らぬようになり、専売制度や特産品づくりに目を向けるようになっていったのが、ちょうど蕪村が京にやって来た時期なのでした。

こうした時代に、宝暦元年六月將軍吉宗の死の直後の七月に側用取次として田沼意次が歴史に登場してくるのです。田沼意次の時代は賄賂が横行した時代として評判が悪く、「越後屋、お前も悪よのう」「いえない、殿様ほどでは」という言葉が飛び交った時代というイメージが強いのですが、さにあらず。専売制度・株仲間の公認・流通過程への課税・貨幣改革といった革新的で大胆な経済政策を

とり現代での歴史学ではかつての悪評とは違ひ一定以上の評価を与えられています。この田沼意次が失脚するのは一七八六（天明六）年のことですから、それは蕪村六十八歳の死から三年後のこと。蕪村の京都時代は丸ごと田沼時代と重なるといつてよいでしょう。

二

さて、蕪村です。京にやって来た蕪村が少し寂しくなったのか、宝暦元年十一月に結城の二世早見晋我（早見桃彦）宛に出した手紙が残っています。残念ながら最初の部分に欠損があり、その部分は「」で示します。書き出しから知人友人の少ない京で人恋しい思いがあふれています。まず、かつての友人に手紙のおねだりです。

「」 「榎木町」「屋与八迄右の所付けにて御登せ下さるべく候。此の書き付け、壁に貼り付け差し置かれ、後失念なく御登せ下さるべく候。

上洛当初は浄土僧のつながりもあつて東山知恩院あたりに身を寄せたらしいという説もありますが、この手紙によれば京で最初に住んだのは今の京都市上京区の榎木町（さわらぎちよう）通あたりであることが分かります。榎木町通は丸太町通の一筋北の烏丸通より西をいいます。

京都御所のすぐ西です。

「所付け」は住所、「御登せ下さるべく候」とは「京の地まで手紙を送ってください」の意。手紙のおねだりです。しかも自分の住所を書いた書き付けを「壁に貼り付けておいてほしい。そして、お忘れになることなく手紙を送ってください」といつています。かわいそうになるくらい蕪村の寂しくてたまらない気持ち伝わってきます。

ついで手紙には大事な用件が記されています。

平林氏一行もの、あるいは聯二三枚もらい下さるべく候。当地、庵中に掛け申したく候。ほかに風流家よりたつて所望いたされ候。何とぞ二三枚貴公の御徳をもって拝戴願ひ奉り候。一生の御頼みに御座候。大黒したため御札に相下し申すべく候。

平林氏とは当時江戸で評判の高かった書家平林静齋のこと。その静齋の書を一行物あるいは対になる双聯を二、三枚もらつてほしい、と懇願しています。理由は自分の住む部屋に掛けるだけではなく、京の風流家からどうしても欲しいといわれていたのでしょうか。静齋への書の依頼を桃彦が仲介し京での注文を蕪村がさばっていたようです。蕪村は静齋の書を京に知人友人を広げる手段として是非とも欲しかったのでしよう。その御札に大

黒天像を描いて送るといっています。結城あたりでは蕪村の大黒天像をほしがる人は多かったようですが、京では新参者の蕪村。まだ無名で彼の書画を欲しがる者はいなかったでしょう。

続いて自分の近況を伝えていきます。

京都所々見廻り、さてさておもしろく
相暮し候。先頃、伏見へ参上し滞留いたし候。……中略……一兩年なじみ候はば、ひとしほ面白く候はんと、楽しみまかりあり候。まずまず平林公の墨跡、かならずかならず頼み奉り候。ぜひひ相待ち申し候。

京にやって来た蕪村はさっそく京都見物に歩き回って「さてさて面白く」と、都の雰囲気を楽しんでいます。そして一、二年もして都に慣れたら「ひとしほ面白く候はん」ともいつています。たぶん、蕪村のこの精力的な京都見物は俳諧の材料さがしというよりも画修業のために諸寺に蔵されているふすま絵や屏風絵などの閲覧を願って見て歩いたのでしょう。京は町全体が第一級の美術館のようなもの。浮き立つような思いで見まわったのでしよう。伏見に行つて泊まったという記述も気になります。芭蕉が伏見西岸寺任口上人に逢つたときの句が心にあって伏見まで出かけたのかもしれない。

我が衣に 伏見の桃の しずくせよ

この句は芭蕉の紀行文「野ざらし紀行」に収められていて有名な句ですが、伏見西岸寺の近くには中書島という遊里もあり、何しに行つたのかと想像すると少し楽しくなります。前にも述べましたが、後年、蕪村は俳諧師という職業上によつてもかもしれませんが島原・三本木・八幡の橋本といった遊興の地によく足を運んでいますので、彼は決して真面目一辺倒の石部金吉金兜ではありません。むしろ少し寂しがり屋で人とワイワイするのが好きな人ではなかったでしょうか。末尾でくどいほどに平林静齋の作品を求めているのが、ほほえましく感じられます。

さすがに都の美しさに心を動かされたためでしょうか、次の句を手紙の最後に添えています。

鴛鴦に 美をつくしてや 冬木立

京で鴛鴦（おしどり）の名所といえば石庭で有名な竜安寺の鏡容池。「池の面には水鳥むれあつまり、玄冬の眺めをなす。これを竜安寺の鴛鴦とて名に高し」と「都名所図会」（一七八〇（安永九）年刊）にも書かれています。時季は冬。竜安寺の鏡容池には多くの鴛鴦が群れ飛んでいたのでしょうか。そして色を失った冬木立が池の周囲には多く立ち並んでいます。鴛鴦の目を奪う美しさと冬木立の単色の対比。これこそがこの句の眼目です。

よう。また、「美をつくして」に「論語」卷第二八佾（はちいつ）第三にある「子韶をのたまはく、美をつくせり、善をつくせり（先生が舜の音楽である韶を批評された。美しさも十分だし、さらに善さも十分だ）」を踏まえているのもミソといえればミソです。中国や日本の古典を踏まえていることが蕪村の頃はまだ句作りには重要でした。句意は次のとおり。

美しい飾り立てた鴛鴦に、この世のすべての美が尽くされているようだ。
墨絵のような冬木立の間に群れ遊ぶ鴛鴦の色合いの何と美しいこと。

三

鴛鴦に 美をつくしてや 冬木立

をめぐつてもう少し話を進めます。

この句に芭蕉の「さび（寂）」を求めるのは困難かもしれませんが、「さび」を句に備わる閑寂な情調ととらえる一般的な理解は決して間違いではないのですが、芭蕉の真意とは少しずれると感じています。

では、「さび」とは何でしょうか。向井去来は「去来抄」の中で「さびとは何か」と人から問われたとき、このように答えたと言っています。

「『さび』は色の句なり。閑寂なるを

いうにあらず。たとへば、老人の甲冑を帯し戦場に働き、錦繡を飾り御宴にはべりても、老いの姿あるがごとし。にぎやかなる句にも、静かなる句にも有るものなり。」

分かりにくい説明ですが、いうところは「さび」とは華やかな情景の中にあつて一抹の寂寥とした要素をとらえることこそが「さび」の真髓だ、ということでしょうか。だから師の芭蕉は

花守や 白き頭（かしら）をつき合わせ

という句を「寂色がよく出ている」と喜んで、と去来はいつています。

だとすれば、田沼意次による緩和政策の時代に京の地で俳人としての円熟期を生きた蕪村は芭蕉のいう「さび」を最もよく表現し得た俳人といつてよいのかもしれない。

いや、むしろ蕪村が京都で生活していた時代こそが華やかな情景の光に対して暗い世相の闇を持った時代でした。現代と同じく豪商を中心として富裕層はいつその富の蓄積をし、庶民は厳しい生活に苦しみました。そして都市だけではなく貨幣経済の波は農村にまで及んで多くの農民が貨幣制度のもとでの貧に苦しんでいました。しかし、そうした小経営の農民の苦悩を知らぬげに、綿、菜種油、生糸の商品流通が盛んになり、それにつ

れて商品経済が自然経済を切り崩して階層分化を推し進めました。幕府により永代に田畑は売買が禁止されていたはずが、それはすでに有名無実化して借金に窮迫した小経営農民の土地を買いあさって大地主が次々に生まれ、そのため多くの小作人が急速に増加したのはこの時代からです。

蕪村はこうした時代の闇にある本質的な部分をしっかりとつかんでいた俳人でした。いくつか例を示します。

- ① 菜の花や 油とぼしき 小家がち
- ② 百姓の 生きてはたらく 暑さかな
- ③ 宿かせと 刀投げ出す 吹雪かな

いずれも蕪村五十代から六十代の句です。すでに述べたように近畿圏では当時、菜種油を製造するために菜の花が多く栽培されていました。あたり一面に菜の花を作付けしながら、自分の家ではできる限り灯心を細くして油を切りつめている貧しい農民の姿が①の句には詠まれています。

②の句は蕪村の召波宛の手紙に「右、此の程仕り候。あしく候へども、書き付け候」という言葉とともに記された句です。在郷商人の増加、旧地主の没落、貧農の激増という農村の変貌の中で酷暑の中で、背を屈めて稲の間に生えた雑草を取るという苦しい作業を続ける百姓の姿を自分の目で見たことがあるかもしれ

ません。確かに萩原朔太郎のいうとおり写生の句とはいいにくいのですが、作句にあたって蕪村の心に強く印象づけられた風景だとすれば、その風景を見た蕪村の心の動きも感じとれます。

蛇足ですが、私がこの句を初めて見たのは学生時代のころ桑原武夫編「一日一言」(岩波新書 1956年刊 212ページ)という本でした。そこには「いかのぼりきのふの空の 有りどころ」や「うれひつつ 丘に登れば 花いばら」などよく知られた句と並んでこの句があり、蕪村にこのような句があつたのかと驚いたのを覚えています。ひよつとしたら桑原武夫さんもこの句に私と同じような衝撃を受けたのかもしれない。

③の句は窮迫した武士の姿であり、それ以上の説明は不要でしょう。当時「つぶれ武士」「乞食旗本」という言葉がありました。

例に挙げた三句はいずれも田沼時代の闇の部分です。貧困に苦しむ人あれば握りの富裕な人々がいいます。闇があれば光があり田沼時代はあふれる富の蓄積のもと放縦な世情となった時代でした。

口切りや 北(喜多)も召されて 四畳半

先の三句と同時代の句ですが、「口切り」とは十月に新茶の口を切って催す茶会のこと、「喜多」能楽の四流の一つ喜多流のこと、「四畳半」は茶室のことです。

豪商の家では能楽師も呼び寄せて茶会が開かれています。さぞかし華やかな会であつたのでしょう。

蕪村は時代に横たわっている光と闇をしっかりと見据えることのできる俳人でした。彼自身は芭蕉が「憂き我を さびしからせよ 閑古鳥」と詠んだような余裕はほとんどなく

貧乏に 追いつかれけり けさの秋

と貧乏に嘆く市井の人でしたが。

四

「鴛鴦に 美をつくしてや 冬木立」を考へる上でもう一つの句を見てみます。

住吉の 雪に額(ぬか)づく 遊女かな

蕪村六十二歳の句です。あたり一面、雪におおわれた住吉神社の社殿に何事かを一心に祈る遊女を描いています。もちろん、蕪村が目をとめたのは白雪の中になかば埋もれるように祈っているなまめいた遊女の姿、その鮮やかな色彩であつたでしょう。鮮やかな色彩にいろどられた遊女、そのまわりにあるのは単色の雪の世界。「鴛鴦の……」の句と同じ構図で彼の美の世界が描かれています。同時に田沼の時代の世情をそのまま描き尽くし

ているかのように見えます。雪に額をつけて祈り続ける遊女の姿がなまめけばなまめくほど、この遊女の苦悩が、この句を読む人の心に響いてきます。

このような視点で考えていくと京で俳人として大成しようとしていた蕪村が、その生活の当初からすでに自らの美学の基本的な方向性をもっていたということ(「鴛鴦の……」の句は示していたのではないかと思えるのです)。

隠された歴史(21)

満田正賢

前月号で考察した内容をまず斉明天皇、天智天皇(中大兄皇子)、倭姫王(やまとひめ)の関係についておさらいします。蘇我入鹿が目の前で中大兄に殺されたことにショックを受けた皇極天皇が退位を決断したという経緯を考えると、次の孝徳天皇逝去の後で皇極天皇が重祚したとは考えにくく、古田武彦氏が考察したように、孝徳の後の天皇とされる斉明は筑紫にいた倭国(九州王朝)王だったと考えられます。中大兄は孝徳から近畿天皇家の家督を引き継いだ後に筑紫にはせ参じて、倭国王の名目的な配下として百済支援の戦いに協力しました。又天智天皇

の皇后となった倭姫王は、過去反逆罪で処刑された古人大兄の娘であるとすると皇后の資格があった人物であるとは考えられません。倭姫王は齊明から王権を継いだ倭国（九州王朝）の女王であったと考えられます。倭姫王は倭国王たる齊明の娘だったのでしよう。白村江敗戦後、中大兄は庇護を求めた倭姫王を伴って近江に移り、そこで倭姫王と婚姻して自ら倭国王を名乗り、国名を日本国に変えたと思われまふ。それが天智七年になつてようやく天智が即位した理由です。

次に天武天皇（大海人皇子）の動向についておさらいします。大海人は中大兄が筑紫に来る以前から筑紫におり、額田王、胸形君德善の娘尼子姫、宋人臣大麻呂の娘かじ娘の三人を妃にしていました。そして大海人は白村江に従軍し、唐の捕虜となり、唐に対して自らを筑紫君サチヤマと名乗りました。大海人は帰国後筑紫都督となり、唐の倭国占領軍の長である郭務儆の支援を受けて壬申の乱に勝利し、日本国王となりました。そこで明確にしなければならぬのは、はたして大海人は九州王朝側の人間だったのか、それとも近畿側の人間だったのか、ということです。ここまでが前回のおさらいです。

天武天皇（大海人）の眞の姿を探るために重要な要素と思われることの一つは天武の天皇名です。天武の天皇名は「天淳中原瀛真人（あまのぬなはらお

きのまひと）天皇です。天武期に作られた「八色の姓（やくさのかげね）」では、臣下を「真人（まひと）、朝臣（あそみ・あそん）、宿禰（すくね）、忌寸（いみき）、道師（みちのし）、臣（おみ）、連（むらじ）、稻置（いなぎ）」という八つの姓に区分けしています。「真人」とは皇族系ではあつてもあくまで「臣下」の名前です。ウイキペディアでは「真人」に天皇も加えていますが、それは天武の名前を考慮しているからです。天武の天皇名からみれば、天武の前身は倭王でも天智の弟で皇太子でもなく近畿天皇家の臣下であつたと考えられます。

次に参考になるのは、日本書紀に引用されている伊吉連博徳書に描かれた白村江前の大和朝廷と「別倭種（九州王朝）」との関係です。伊吉連博徳書については古田氏の「失われた九州王朝」において、旧唐書の「倭国」と「日本国」の関係を記述したものであり九州王朝の存在の証拠としていますが、韓国の政治学者である李鐘恒（イ・ジョンハン）氏の「韓半島から来た倭国（新泉社）」という本の中の「伊吉連博徳書の意味と本質」という項目を読むと古田氏の考察がよく理解出来ます。以下は「伊吉連博徳書の意味と本質」の概要です。

伊吉連博徳は齊明五十七年（六五九）六六一）第四次遣唐使一行に随行し帰国しています。白村江の戦い（六六三）の直前です。その時に帰国報告書ともいえる

伊吉連博徳書を中大兄に対して提出したと考えられます。彼は天智三年（六六四）には大乙中の冠位をもち、郭務儆を大宰府に応接し、同六年（六六七）には小山下に昇位して、唐使である司馬法聰の送使の役割を果たしています。その後持統元年（六八七）には謀反事件に連座しましたが、同九年（六九五）にはまた昇位して、遣新羅使に任命されています。文武四年（七〇〇）従五位にあたる勅広肆に昇進して大宝律令の編纂者に任命され、大宝三年（七〇三）にはその任務を無事終了したため受賞しています。伊吉連博徳の帰朝報告書は、非常に客観的で詳細な、当時の唐への留学生に関する記録として、高く評価された文書であつたと想像出来ます。

さて伊吉連博徳書は日本書紀に、孝徳白雉五年（六五四）二月条、齊明五年（六五九）七月条、同六年（六六〇）七月条、同七年（六六一）五月条、と計四回引用されています。加えて持統四年（六九〇）一〇月条に關連記事があります。この中で注目されるのは、孝徳白雉五年二月条の中で、帰朝した遣唐使の中に「別倭種韓智興、趙元宝」という二名が記されていることです。

「伊吉博得言『學問僧惠妙於唐死、知聰於海死、智國於海死、智宗以庚寅年付新羅船歸、覺勝於唐死、義通於海死、定惠以乙丑年付劉德高等船歸。妙位・法勝・學生水連老人・高黃金并十二人・

別倭種韓智興・趙元寶、今年共使人歸。』
そして齊明五年七月条では韓智興の供人西漢大麻呂が、同七年五月条では韓智興の供人東漢草直足嶋が、いずれも唐に向かつて日本国（大和朝廷）の使者を誹謗中傷したということが記されています。

「韓智興兼人西漢大麻呂、枉讒我客。」
「爲智興兼人東漢草直足嶋所讒、使人等不蒙寵命。」

又持統四年一〇月条の文面にある頭注では、唐に捕虜となつた「弓削連元宝の子」の弓削連元宝は、孝徳紀に引用された伊吉連博徳書にある趙元宝と同一人物であろうと記されています。この頭注が正しいとすると、「倭種」と呼ばれた韓智興、趙元宝は共に日本名を持つていたこととなります。更に「倭種」＝倭国（九州王朝）の人間が白村江で捕虜になつていたということになります。

以上李氏がまとめた「伊吉連博徳書の意味と本質」の内容を紹介しましたが、伊吉連博徳書には、白村江前に大和朝廷が独立して唐と応対しており、倭種＝倭国（九州王朝）は唐に向かつて大和朝廷を誹る存在として描かれているということです。伊吉連博徳は天武期には不遇だったという説もありますが、齊明五年（六五九）から大宝三年（七〇三）にわたつて大和朝廷において最終的には政権の中核にいた人物であるということは間違いありません。その事実からも天武が九州王

朝側の人物であったとは非常に考えにくいことです。

次に、万葉集の代表的な歌人の一人である額田王について考えてみましょう。

その前に万葉集について考察しておかなければなりません。万葉集に収められた歌の真実については、古田武彦氏が万葉三部作といわれる「人麿の運命」「古代史の十字路―万葉批判」「壬申大乱」の中で詳細な研究を行っています。私なりに要点をまとめると、「万葉集の中では九州で作られた歌、白村江の戦いを歌った歌が消されている。しかし、それは歌としては残っており、ただそれが近畿で作られた歌としての題詞を付けられている。その為には大和盆地にカモメが飛んでいたたり、琵琶湖に鯨が泳いでいたりするのである。」ということだ。

私を取り上げた歌について説明を加えておきます。

A 「大和には群山あれどとりよるふ天の香具山登り立ち国見をすれば国原は煙立ち立つ海原はかまめ立ち立つうまし国そあきづ島大和の国は」

*これは万葉集巻一の一の二番歌で舒明天皇の歌とされるものです。一番歌として有名な雄略天皇の「竈もよみ竈持ち……」に続く歌です。一番歌、二番歌については、大和朝廷賛美の立場から、古くから伝えられている歌の作者を雄略天皇、舒明天皇としたものであろうと言

われています。「万葉集編纂論」市瀬

雅之著・おうふう）古田氏はこの二番歌に描かれた風景が日本書紀の景行紀に記された別府湾の風景にピッタリ合うと考察しています。

B 「鯨魚（いさな）取り淡海の海を沖放けて漕ぎ来る船辺付きて漕ぎ来る船沖つ懼いたくな撥ねそ辺つ懼いたくな撥ねそ若草の夫の思ふ鳥立つ」

*これは万葉集巻二の百五十三番歌で天智天皇逝去の時の一連の挽歌のなかで倭太后が歌った歌とされています。前後の歌との関係から、倭太后（倭姫王）の挽歌であることは間違いないでしょう。この歌の「淡海」とは天智天皇の近江朝との関連で琵琶湖であろうとされていますが、琵琶湖に鯨が泳ぐはずはありません。倭姫王が天智（中大兄）と初めて出会った博多湾は当時入り江が現在の住吉神社まで達しており那珂川の淡水が湾に入り込んでいたと思われまます。倭姫王が博多湾の沖の玄界灘で鯨が泳いでいたという若き日の思い出を偲んでいると考えればピッタリするのではないのでしょうか。

通説では万葉集全二十巻のうち第一巻・第二巻は初期に編集されていたとされ、表面上は大和朝廷賛美の歌が続いていますが、そこに採用された歌の多くは筑紫で作られた原万葉集から拝借されたものと考えられます。私は、倭国（九州王朝）はすでに実権を近畿勢力に握られ

名目だけの存在になっていたと考えてい

ますが、「没落する王朝には文化の花が咲く」という言葉は洋の東西を問わない真理ではないのでしょうか。

額田王は万葉集巻一巻二に登場する歌人ですが、その正体が不明です。日本書紀には「額田姫王」と記されており皇族であるのは間違いないですが、天智天皇の最初の妃であったことと、鏡王の娘であったこと以外はわかりません。しかし、鏡王を宣化天皇の子孫とする系図が存在します。「宣化天皇↓火焰皇子↓阿方王↓額田鏡王（*『新撰姓氏録』右京皇別、撰津皇別）」。「正体不明の皇族である額田王は、私の仮説に従って宣化天皇の子が倭国（磐井王朝）を乗っ取って建てた後期九州王朝の皇族と考えるとピッタリ合います。

私は額田王こそが倭姫王であり鏡王が倭国王たる斉明天皇である可能性もあると考えていますが、とりあえず、額田王は倭国（後期九州王朝）の宮廷歌人であり、最初大海人（天武天皇）に嫁いたが、万葉集に描かれているように白村江のあと中大兄と再婚したと考えてみましょう。

熟田津で歌った歌は、難波から筑紫に行く時の歌ではなく、筑紫から近江に行く時の途中で歌った歌ではないかと考えられます。天武と額田王の子である十市皇女は大友皇子の正妃です。額田王は壬申の乱の時に近江朝側にいたと考えられます。

次に天智天皇が倭国王として即位後、

九州年号を改元した可能性について触れます。古田史学の会の正木裕氏は、「襲国偽僭考」（そのくにぎせんこう）など複数の書物に、天智天皇が即位後「中元」と改元し、天智死後、大友皇子（弘文天皇）が「果安」と改元したと記されていることに注目しています。（『近江朝年号』の研究・失われた倭国年号（大和朝廷以前）―古代に真実を求めて―古田史学論集第二十集（明石書店）収録」天智天皇は倭国（九州王朝）を継いだわけですから九州年号を改元するのはある意味当然のことです。しかし、問題はそれが日本書紀の中では隠されており、大和朝廷が正式に年号を建元したのは七〇一年の「大宝」であると続日本紀に記されていることです。つまり、天武天皇は年号を建てず、それが持続にも引き継がれた、ということ。その理由は何か。倭国及び朝鮮半島の歴代王朝の歴史を見ても、中国から將軍の称号をもらい、すなわち中国の冊封（さくほう）下に入った時には自らの年号は建てていません。冊封から離れて初めて年号を建元しているのです。前期九州王朝（倭の五王時代）は中国から「使持節 都督 倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大將軍 倭王」などの称号をもらい中国南朝の冊封下にありました。従って年号を建てていません。天武天皇があえて年号を建てなかった、そしてそれを日本書紀が隠した理由は、天武期には大和朝廷は唐の冊封下に

入っていたということにあるのではないでしようか。前回考察した、天武天皇が筑紫都督であり唐の支援をもらって壬申の乱に勝利したという仮説が、この年号に関する仮説とピッタリ一致します。すなわち、天智天皇、大友皇子(弘文天皇)の近江朝は名目上九州王朝の継統政権であり、天武天皇こそが九州王朝に引導を渡した大和朝廷の天皇であるということになります。

ここまで、天武天皇の名前、伊吉連博徳書、万葉集と額田王、近江朝年号の四つの要素から白村江前後の大海人(天武天皇)と中大兄(天智天皇)の関係、そして倭国(九州王朝)と大和朝廷の関係を追ってみました。それを前月号の考察に加えてみます。その結果次のような仮説が成り立ちます。

大海人は近畿天皇家の臣下(皇族)で筑紫に派遣されており、倭国(後期九州王朝)の宮廷歌人たる額田王を妃としていた人物でした。大海人は白村江で唐の捕虜となり、筑紫君サチャマと名乗って、帰国後筑紫都督となりました。額田王は白村江で大海人が捕虜になった(あるいは死んだと伝えられたか)ことにより、中大兄に庇護を求め、倭姫王と共に(あるいは同一人物か)近江に移り中大兄と再婚しました。大海人は郭務儂の支援を受けて壬申の乱に勝利し、日本国王となりました。

天武(大海人)は日本国王となり、持統を皇后として九州王朝との関係を断ち切って、唐の制度を導入し唐の羈縻(きび)政策に従いましたが、倭国王であった倭姫王(あるいは額田王と同一人物か)には年号制定の名譽を残すことよって一定の敬意を払いました。大和朝廷自体は唐の冊封を受けている建前から年号は制定しませんでした。しかし、持続期以後、大和朝廷は唐からの独立を模索し、都の制定(藤原京、律令制の確立、遣唐使の派遣、年号の制定に向かつていきました。

以上が天武天皇の真の姿に関する私の考察です。

孫ウオツチング(32)

福田 圭

六月二〇日(土)に久しぶりに鳥取に行きました。六月一九日コロナの県外異動自粛解除で六か月ぶりの「孫ウオツチング」です。お兄ちゃんの光君は四歳七か月、弟の葵君はもうすぐ三歳になります。

倉吉の家につくと、光君は、いきなり素っ裸でお出迎えます。暑いのか、相変わらずの「天然」ぶりです。レストランにランチを食べに行きまし

た。お店の前で「記念撮影」をしようと思っただですが、なかなか二人とも「写真ポーズ」をとってくれません。シャッターを押しても、すぐ動いてしまつて「失敗作」になります。昔の子どもと違つて、写真を撮つてもらうのが、珍しくなくて嬉しがらないようです。コロナ対策でお店のテーブルの間隔が広くとつてありました。

光君はろくに食べもしないで、すぐ絵本がおいてある「子ども」コーナーに行きます。保育園でも、あまり「協調性」はないようです。葵君は、あまりこぼさずに、黙々とご飯を自分で食べるようになっていきます。言葉数も増えて、成長がうかがわれます。

光君はトイレでウンコが出来るようになっていました。でも、レストランの男子トイレは、家のように子供用の補助便座がないので、お父さんに連れて行かれてもしようとしません。「試しに女子トイレに行つてみたら」ということで、お母さんに連れられて女子トイレに行つたら、用を足すことが出来ました。補助便器があったのか、お母さんと一緒だからできたのか不明ですが。

昼食後、倉吉市内の遊具がいっぱいある公園に行きました。子どもたちは外遊びが好きです。いろんな遊具に次々挑戦します。同じ保育園の女友だちも来ていて、遊具を譲つたり、追っかけっこになったり、大はしゃぎです。光君より体格

は小さい女の子の方が、どちらかというとリーダーシップをとっているようでした。

公園にパン屋さんがあったので、パンを幾つか買ってあげました。お目当ての「アンパン」は売り切れていました。仕方がないのでコンビニで買い置いたアンパンがあったことを思い出して、提供しました。いろいろな種類のパンを一個ずつ買ったのですが、弟と「半分こ」して食べる習慣がないようです。光君は、右手にアンパン、左手にメロンパンを持つて、同時に二つ食べていました。

まあいろいろありますが、半年ぶりで「孫ウオツチング」ができ、孫たちの元気な姿を見て、幸せな気分になりました。

道をゆく(15)

成瀬和之

「熊野街道」(三)

京都から船で現在の大川(旧淀川)を下つて来る熊野詣の人々の上陸地点が、京阪天満橋駅近くの「窪津」(窪んだ船着き場)でした。クボツはタカツ(高津、今の上本町辺りの高い台地)に対する言葉です。

淀川は近代に西向きに付け替えられ、新淀川がつくられました。それまでは、

毛馬から大川（旧淀川）に南向きに流れ
ており、天神橋と天満橋の間に上陸する
ことになったのです。

その地点は、中世は「渡辺の津」、近世
になってからは「八軒家（はちけんや）」
と呼ばれるようになりました。京阪天満
橋駅の道路を隔てた南側に永田屋とい
う昆布店があり、その前に「八軒家船着場
址」の碑と説明板があります。

渡辺の津から生玉、天王寺まで続く松
屋町筋が古代の海岸線で、その東側の上
町台地を熊野街道は通っていました。

現在の「エル大阪」の東側に「窪津王
子」がありました。大阪市中央区石町（こ
くまち）二丁目に坐摩（いかすり）神社（い
かすり）と読むのが正しいが、いまは「ざ
ま」で思っています。）の址地があり、
そこが「窪津王子」の址地と思われま
す。「摂津国府」がここに置かれ、「国府津（こ
うづ）」と称したところから「国府（こく
ふ）」が訛って「こくまち」に転じたもの
（『摂津名所図会』）と考えられます。

イカスリという言葉は「ここに居るこ
とを知る」という意味を含んでいます。
上町台の、つまり古代の大阪の地主神そ
のものでした。

大阪城を築いた豊臣秀吉によって、坐
摩神社は移転を命じられ、大阪市中央区
の現在地（東本願寺南御堂の北西）に移
りました。

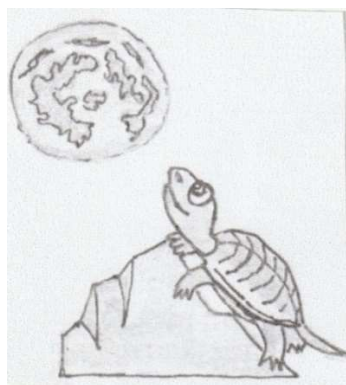
渡辺の津を拠点とする水軍武士団「渡
辺党」に由来して、坐摩神社は全国の渡

辺・渡部姓の発祥の地とされています。
また、落語家の桂文枝（三枝改め）らが
呼びかけて、二〇一一年一〇月に「上方
落語寄席発祥の地」の石碑が建てられま
した。

熊野九十九（くじゅうく）王子とは、参
詣道沿いにあった、熊野権現の御子神を
祀る神社の総称で、九十九は実数ではな
く、それに近いほど多いという意味で、
そう呼ばれました。

「窪津王子」が熊野九十九王子の第一
王子で、坂口王子、郡戸（こうづ）王子へ
と南に進みます。

谷町八丁目交差点（大阪市中央区）の
西に「高津宮」があります。ここに第三
王子となる「郡戸王子」推定地の石碑が
建っています。



編集後記

SK生

▼新型コロナが沈静化したと思いが少しゆる
んだところへじりじりとまた感染者数が増えて

いる。この「芥川たより」が皆さんのお手許に
届くころには「急速な感染拡大」といった事態
になっているかもしれない。元氣よくというわ
けにもいかないだろうが、辛抱強く、この新型
コロナと日々つき合っていく術を模索してい
かねばならないであろう。▼マスク、手洗いと消
毒、ソーシャル・ディスタンスと近所のスパー
ーでの買い物にも気をつかう毎日を送っている
のだが、時々、ふと思うことがある。あるウイ
ルス学者によればウイルスは細菌よりもずっと
接触感染のリスクは低いとか。とすれば飲食店
で神経質なほどにテーブルを店員がアルコール
消毒するのにどれ程の意味があるのか。もつと
いえば感染者のせいでウイルスを数万個まき散
らした時テーブルの上に数百個でもそれが付着
する確率はいかほどなのか。我々が聞くのは危
険だ」という話ばかり。こうした確率的な話
は一向に伝わってこない。「正しく恐れ、正しく
対処する」とはいわれるが、国民に聞こえてく
るのは不安をおおる言葉ばかりで、こうした数
字の根拠は示されない。感染症の対策には自粛
というブレーキも緩和というアクセルも必要だ
ろうが、このままでは困惑するばかりだ。▼ま
だソ連という国があったころ次のような有名な
ジョークがあった。『フルシチョフはアホだ』
ということを言った男が国家極秘事項漏洩罪で
公安警察に捕まった」という話。この話にはオ
チがあつて「フルシチョフがロンドンの国際首
脳会議に参加した直後にこの男は釈放された」
と。このジョークにあるフルシチョフを日本の
某首相に置きかえたとしたら笑う者は誰もいな
いだろう。笑う気にもなれずジョークにならな

いのだ。しかし、我々が政府に最近ちよつとし
たヒットが出た。「イー・ジェス・アショア」計画の
撤回である。このまま計画を進めても全く役に
立たないのだから当然だろう。すると与党内か
ら出てきたのは「敵基地攻撃能力保有論」。この
論が我が国の国是たる「専守防衛」を逸脱する
のはもちろんだが、そもそも攻撃を受けた、受
けないに関わらず、いつたいどこを攻撃するの
か。素人考えだが、おそらく周辺の国々に存在
する基地は百や二百ではきかないはず。このす
べてをねらうつもりなのか。これはもう冗談と
しか思えない。かつて「有事」という言葉をさ
んざん使っていた彼らが新型コロナという未知
の敵が海外から押し寄せてきた今回のありさま
はどうであつたか。我々が目にした彼らの頼り
なさを見れば、彼らが「有事」に本当に役立つ
人たちであるかどうか、国民を真に守ってくれ
るかどうか、不信感はこの一方である。▼ブ
ルガリアの政治学者トドロフ氏は「民主制は運
命論的な諦観を拒否する」といい、カミュは小
説「バस्त」で「絶望に慣れてはいけない」と
いった。コロナ禍の中、信頼を寄せられぬ政府
を頭に抱きながら、我々は諦観にも絶望にも陥
ることなく手に入れた知識とより確かな根拠を
もとに生き抜くための知恵を身につけて行動し
ていくほかはあるまい。「それはそうかもしれぬ
しかし、にも関わらず」とたえずつぶやきなが
ら。

あなたがあの時

沖縄戦終結から七十五年となる去る六月二十三日、沖縄全戦没者追悼式が沖縄県糸満市摩文仁の平和祈念公園で開かれた。この公園にある「平和の礎」には、文字どおり、国籍や人種の別なく、沖縄戦で亡くなった全ての人の名前が刻まれている。それは、この日が、誰がそう決めたのか、こともあろうに、一九六〇年に改定された新安保条約発効の日とされたことと対照的である。追悼式で朗読された「平和の詩」の全文は次のとおりである。

あなたがあの時

首里高等学校三年

高良朱香音

「懐中電灯を消してください」
一つ、また一つ光が消えていく
真つ暗になったその場所は
まだ昼間だというのに
あまりにも暗い
少し湿った空気を感じながら
私はあの時を想像する
あなたがまだ一人で歩けなかったあの時
あなたの兄は人を殺すことを習った
あなたの姉は学校へ行けなくなった
あなたが走れるようになったあの時
あなたが駆け回るはずだった野原は
真つ赤っか 友だちなんて誰もいない
あなたが青春を奪われたあの時

あなたはもうボロボロ
家族もいない 食べ物もない
ただ真つ暗なこの壕の中で
あなたの見た光は、幻となって消えた。

「はい、ではつけていいですよ」
一つ、また一つ光が増えていく
照らされたその場所は
もう真つ暗ではないというのに
あまりにも暗い

体中にじんわりとかく汗を感じながら
私はあの時を想像する

あなたが声を上げて泣かなかったあの時
あなたの母はあなたを殺さずに済んだ
あなたは生き延びた

あなたが少女に白旗を持たせたあの時
彼女は真つ直ぐに旗を掲げた
少女は助かった

ありがとう

あなたがあの時

あの人を助けてくれたおかげで
私は今 ここにいる

あなたがあの時
前を見続けてくれたおかげで

この島は今 ここにある

あなたがあの時

勇気を振り絞って語ってくれたおかげで
私たちは 知った

永遠に解かれることのない戦争の呪いを
決して失われてはいけない平和の尊さを
ありがとう

「頭、気をつけてね」
外の光が私を包む

真つ暗闇のあの中で

あなたが見つけた希望の光
私は消さない 消させない

梅雨晴れの午後の光を感じながら
私は平和な世界を創造する

あなたがあの時
私を見つめたまっすぐな視線
未来に向けた穏やかな横顔を
私は忘れない

平和を求める仲間として

詩の朗読に先立つ玉城デニー知事の
「平和宣言」には、次のような言葉もあ
った。

『県民の平和を希求する「沖縄のこころ」を世界に発信し、国際平和の創造に貢献することを目的として、二〇〇一年に創設した沖縄平和賞の第一回受賞者であるペシヤワール会の中村哲医師が、昨年の末、アフガニスタンで凶弾に倒れるという突然の悲報がありました。中村先生は人の幸せを「三度の飯が食べられ、家族が一緒に穏やかに暮らせること」と説き、現地の人々が生きるために河を引き、干からびた大地を緑に変え、武器を農具に持ち替える喜びを身をもって示されました。私たちは、中村先生の「非暴力と無私の奉仕」に共鳴し、その姿から人々が平和に生きることとは何か学ばせていただきました』

まさしく、

どこにでも水と平和はない地球

を、身をもって示した中村 哲氏の活動であった。

俳句

土田 裕

軽嶋の憩ふ植田や水清し
歩を止めて大瑠璃の声わが胸に
物思ふごと青鷺の動かさる
麦刈られ鳥の巢樹々に残りけり
職退きし日も遥かなり夜店の灯

影山 武司

彫りかけの仏の鑿痕若葉風
屋号ある家の軒ごと燕の子
野良猫の髭のしな垂れ走り梅雨
落雷の走りし跡や樞大樹
白雲の影ゆつたりと青嶺かな
玉砂利の音の抜けゆく夏木立
戴帽式の炎を胸に誓ふ夏
青に青重ねて涼し小倉織
柩守る妻の目札釣忍
藍白の広がる衣桁夏座敷